

鶴見岳・伽藍岳の火山活動解説資料（令和8年8月）

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

8日から9日にかけてと15日に、鶴見岳付近のやや深いところで火山性地震が一時的に増加しましたが、これらの地震活動の前後で、鶴見岳付近の浅い場所における火山性地震の発生状況や、噴気活動等に特段の変化は認められません。長期的にはB型地震¹⁾が時々発生しています。その他の火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

鶴見岳・伽藍岳の想定火口域内では、噴気、火山ガス等の噴出がみられますので、注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴気など表面現象の状況（図1、図2、図3-①③④）

石垣監視カメラ（大分県設置）による観測では、鶴見岳では前月に引き続き噴気は確認されませんでした。

塚原無田監視カメラによる観測では、伽藍岳では噴気が最高で噴気孔上300m（7月：300m）まで上がりました。

26日に九州地方整備局の協力により実施した上空からの観測では、伽藍岳では山頂南側の噴気地帯の噴気の状況に特段の変化は認められませんでした。鶴見岳では地獄谷赤池噴気孔や山体の状況は、雲のため確認できませんでした。

・ 地震や微動の発生状況（図3-②⑤～⑦、図4、図5）

火山性地震の月回数は295回（7月：289回）でした。

8日から9日にかけて、鶴見岳山頂の東2kmの深さ約3～5km付近を震源とする火山性地震が一時的に増加し、9日01時32分に発生した地震（マグニチュード3.1）では、別府市鶴見と別府市上野口町で震度2を観測しました。また、15日には鶴見岳山頂の南西1～2kmの深さ約4～5km付近を震源とする火山性地震がやや増加しました。これらの地震活動の前後で、鶴見岳付近の浅い場所における火山性地震の発生状況や、噴気活動等に特段の変化は認められませんでした。鶴見岳周辺では、これまでにも火山体内の活断層近傍で地震活動が時々みられており、今回の地震活動もこれらと同様のものと考えられます。

1) 一般的に、火山性地震のうち、相が不明瞭で、比較的周期が長いものをB型地震と呼んでいます。火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年9月分）は令和8年10月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び大分県のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

その他、震源が求まった火山性地震は、鶴見岳山頂の西2～4 kmの深さ約2 km付近及び伽藍岳山頂の南1 kmの深さ約2～3 km付近に分布しました。周辺の領域で震源が求まった地震は、由布岳の北西約2 kmの深さ約7 km付近でした。B型地震は観測されませんでした。

火山性微動は2010年11月の観測開始以降、観測されていません。

・地殻変動の状況（図6、図7）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められません。



図 1-1 鶴見岳・伽藍岳 噴気の状況（8月30日、石垣監視カメラ（大分県設置））
鶴見岳では、噴気は前月に引き続き確認されませんでした。



図 1-2 鶴見岳・伽藍岳 噴気の状況（8月28日、塚原無田監視カメラ）
伽藍岳では、噴気が最高で噴気孔上300m（7月：300m）まで上がりました。



図 2-1 鶴見岳・伽藍岳 伽藍岳周辺の状況（左：8月26日、右：2025年8月26日）

26日に九州地方整備局の協力により実施した上空からの観測では、伽藍岳山頂やその周辺の状況に、新たな噴気などの異常は認められませんでした。

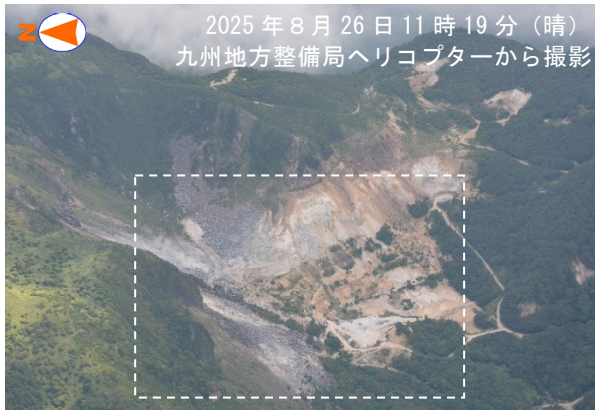


図 2-2 鶴見岳・伽藍岳 伽藍岳の噴気地帯の状況（上段：8月26日、下段：2025年8月26日）

26日に九州地方整備局の協力により実施した上空からの観測では、伽藍岳山頂南側の噴気地帯の噴気の状況に特段の変化は認められませんでした。

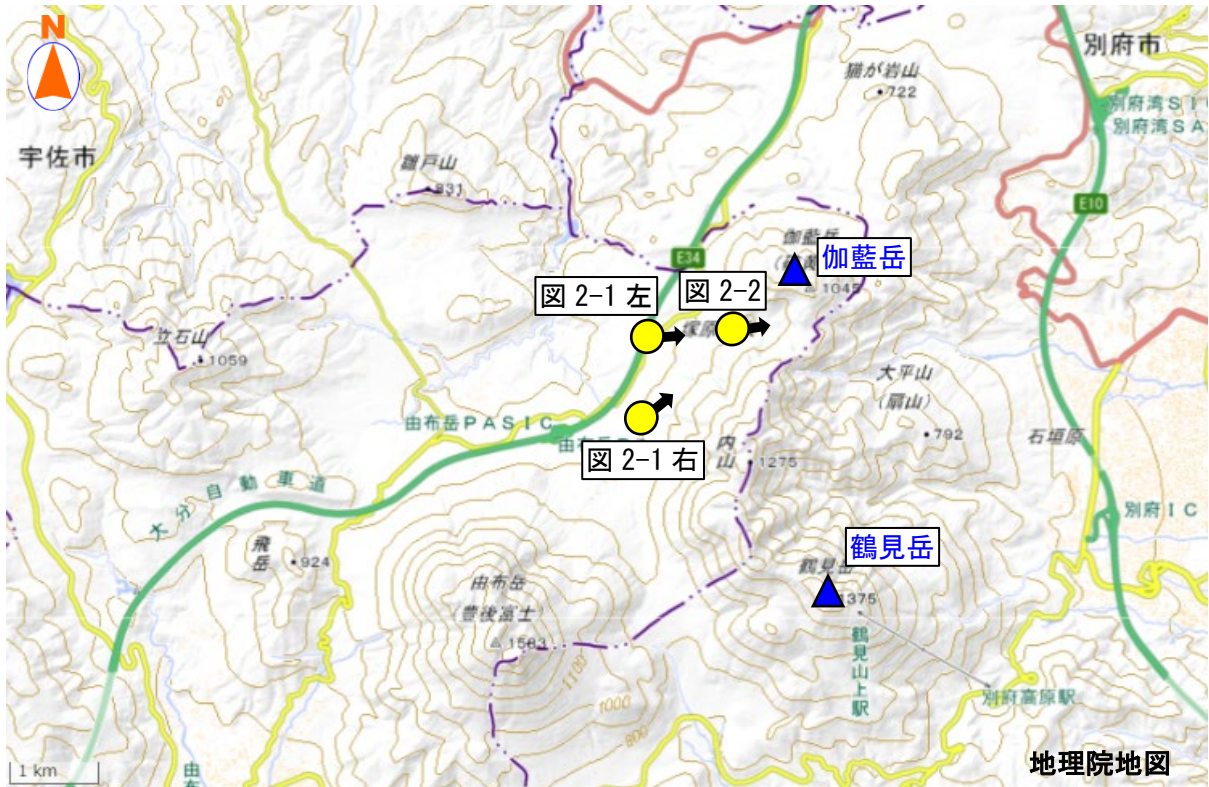


図 2-3 鶴見岳・伽藍岳 26 日に実施した機上観測位置及び撮影方向

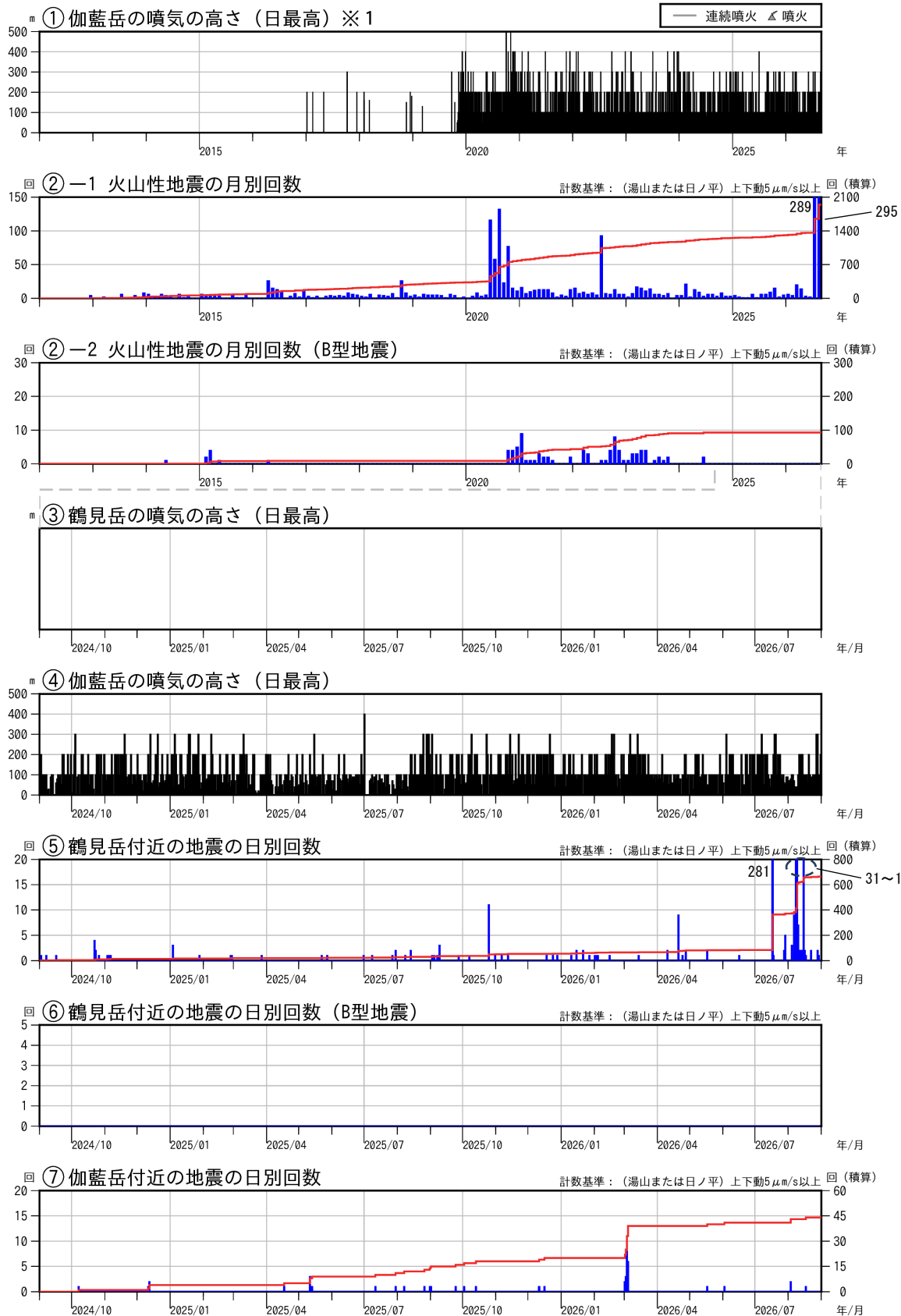
図 3（次ページ） 鶴見岳・伽藍岳 火山活動経過図（2012 年 1 月～2026 年 8 月）

< 8 月の状況 >

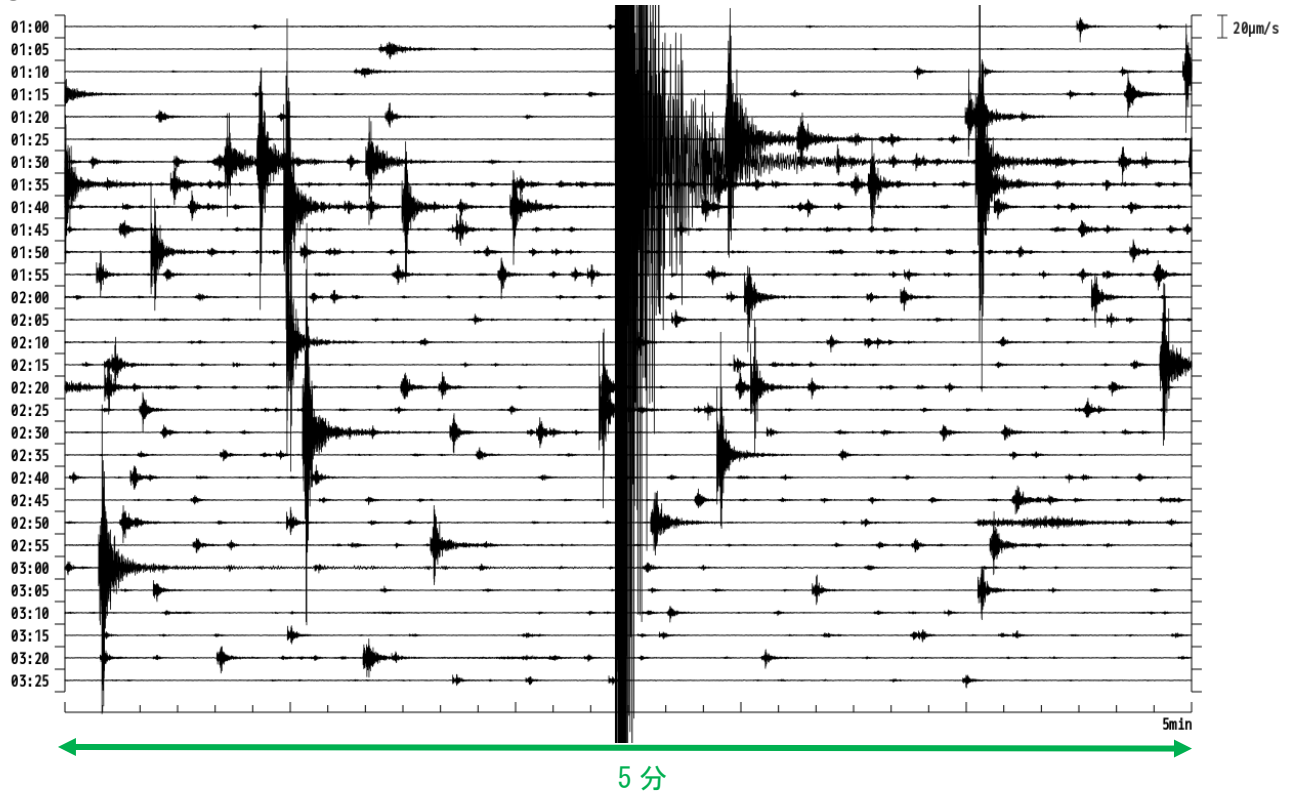
- ・ 鶴見岳では、噴気は前月に引き続き確認されませんでした。
- ・ 伽藍岳では、噴気が最高で噴気孔上 300m（7 月：300m）まで上がりました。
- ・ 火山性地震の月回数は 295 回（7 月：289 回）でした。8 日から 9 日にかけて、鶴見岳山頂の東 2km の深さ約 3～5 km 付近を震源とする火山性地震が一時的に増加しました。また、15 日には鶴見岳山頂の南西 1～2 km の深さ約 4～5 km 付近を震源とする火山性地震がやや増加しました。B 型地震は観測されませんでした（7 月：0 回）。

※ 1 伽藍岳の噴気の高さは 2019 年 11 月より塚原無田監視カメラにより計測しています。

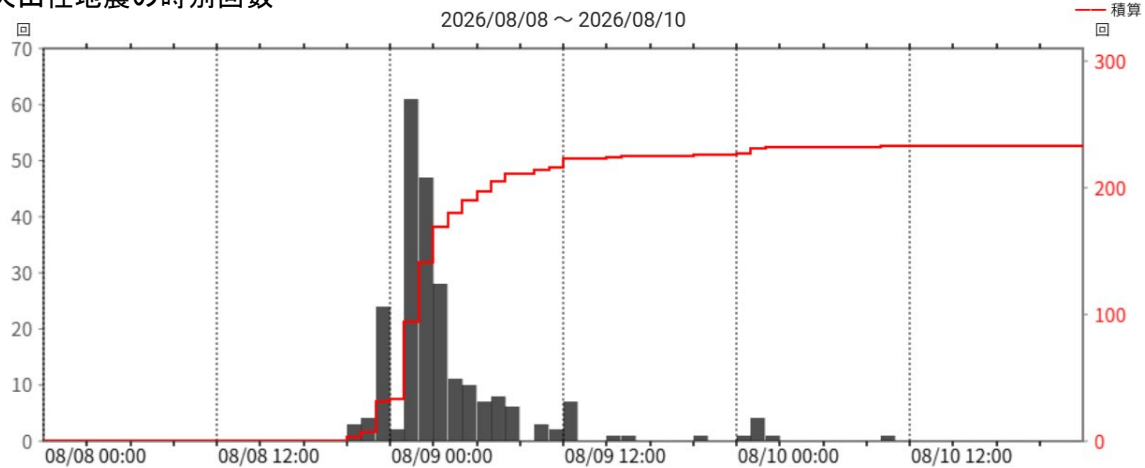
赤線は火山性地震の回数の積算（右軸）を示します。



① 火山性地震の発生状況（2026年8月9日01時00分～03時30分、日ノ平観測点上下動成分）



② 火山性地震の時別回数



③ 火山性地震の最大振幅（日ノ平観測点上下動成分）

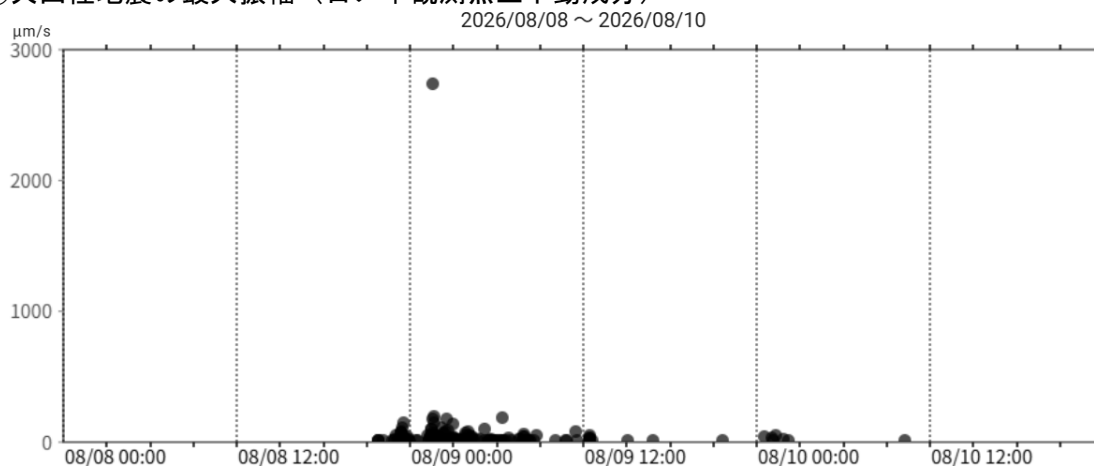


図4 鶴見岳・伽藍岳 火山性地震の発生状況（2026年8月9日01時00分～03時30分、日ノ平観測点上下動成分）、及び時別回数と最大振幅（2026年8月8日～10日）

8日23時頃から9日06時頃にかけて、鶴見岳山頂の東2kmの深さ約3～5km付近で火山性地震が一時的に増加しました。

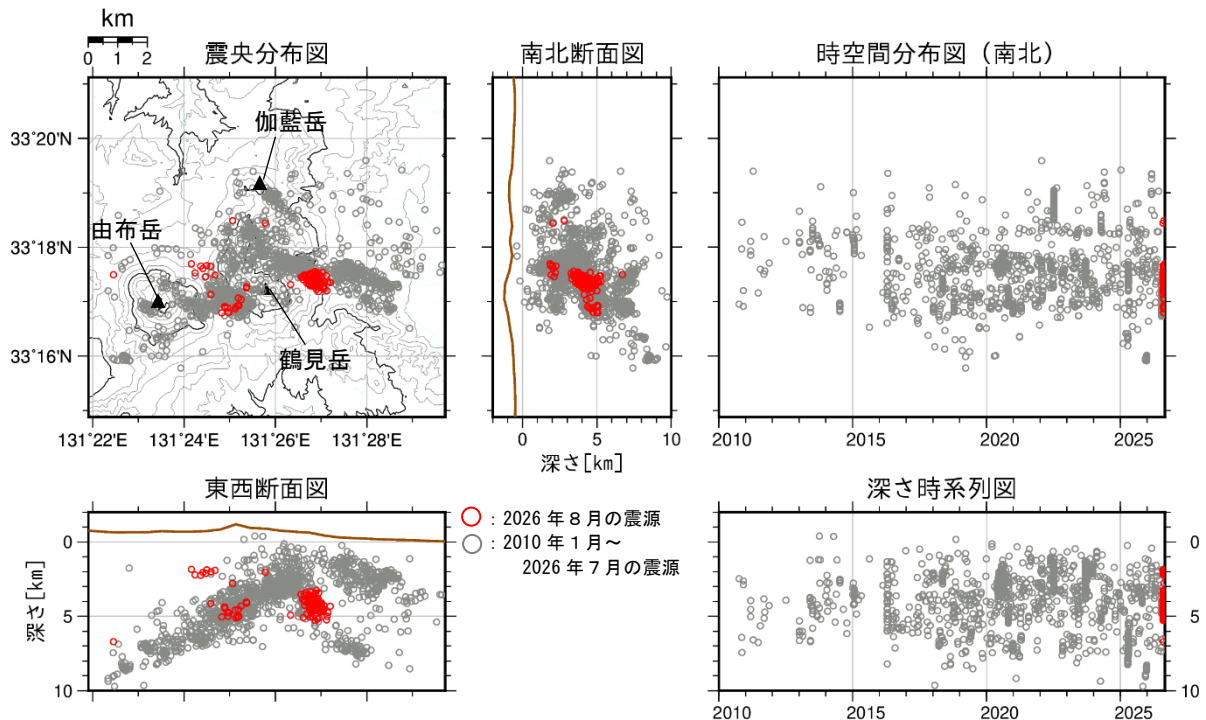


図5 鶴見岳・伽藍岳 震源分布図（2010年1月～2026年8月）

< 8月の状況 >

- ・ 8日から9日にかけて、鶴見岳山頂の東2kmの深さ約3～5km付近を震源とする火山性地震が一時的に増加しました。また、15日には鶴見岳山頂の南西1～2kmの深さ約4～5km付近を震源とする火山性地震がやや増加しました。
- ・ その他、震源が求まった火山性地震は、鶴見岳山頂の西2～4kmの深さ約2km付近及び伽藍岳山頂の南1kmの深さ約2～3km付近に分布しました。
- ・ 周辺の領域で震源が求まった地震は、由布岳の北西約2kmの深さ約7km付近でした。

山体周辺及び山体下の深さ10kmまでの地震を表示しています。

近傍の観測点（湯山、日ノ平、内山北尾根、鶴見岳西山麓）において、P波とS波の到達時間差が概ね1秒以内の地震を掲載しています。その中で、鶴見岳・伽藍岳付近の地震を火山性地震としています。

2017年3月24日の鶴見岳西山麓観測点の整備により震源決定の精度が向上しています。

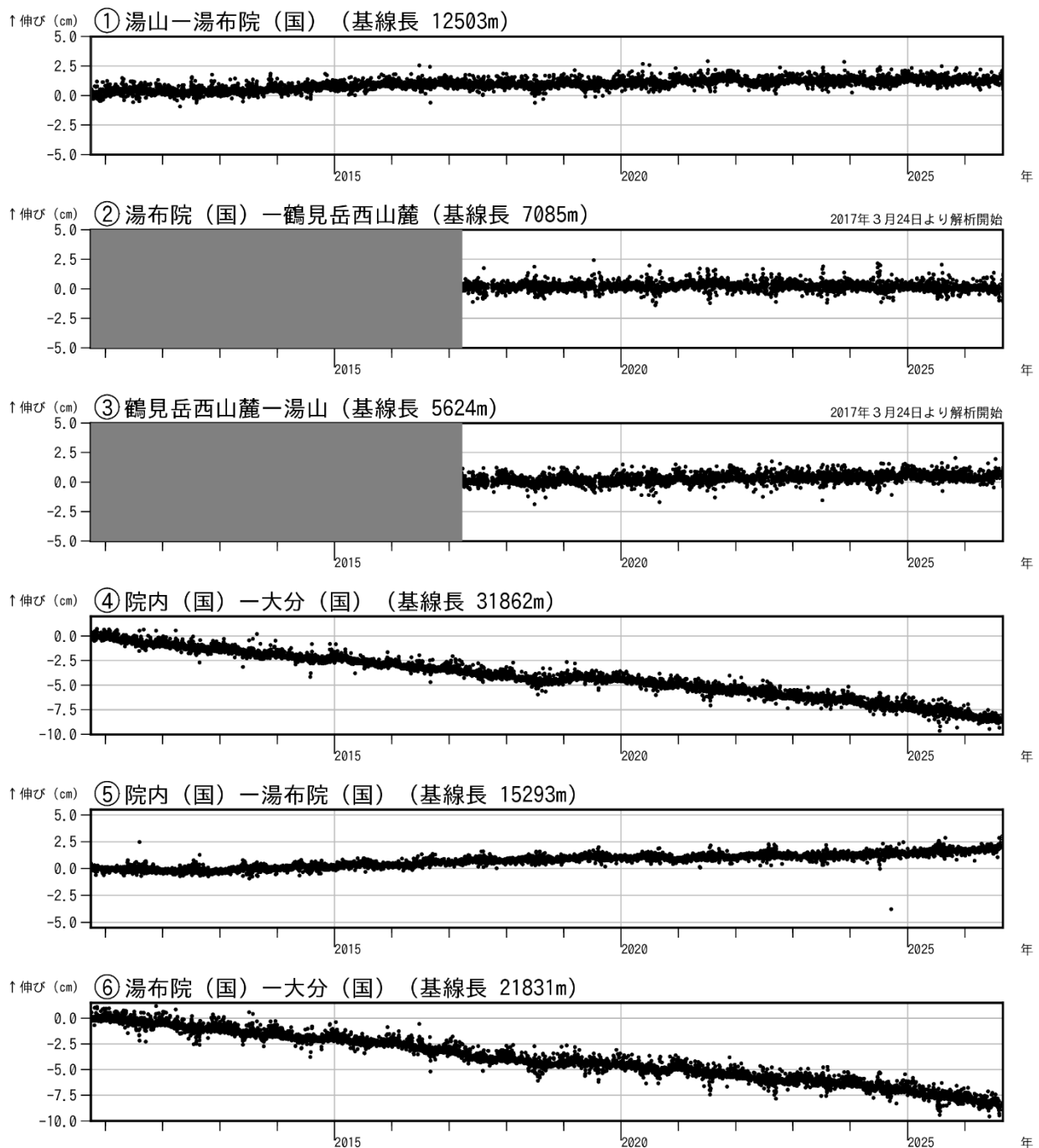


図6 鶴見岳・伽藍岳 GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2026年8月）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められません。

この基線は図7の①～⑥に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年（2016年）熊本地震の影響による変動が大きかったためこの地震に伴うステップを補正しています。

2018年頃から2019年頃にかけて、日向灘北部及び豊後水道周辺のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定される地殻変動がみられます（基線④、⑥）。

（国）：国土地理院

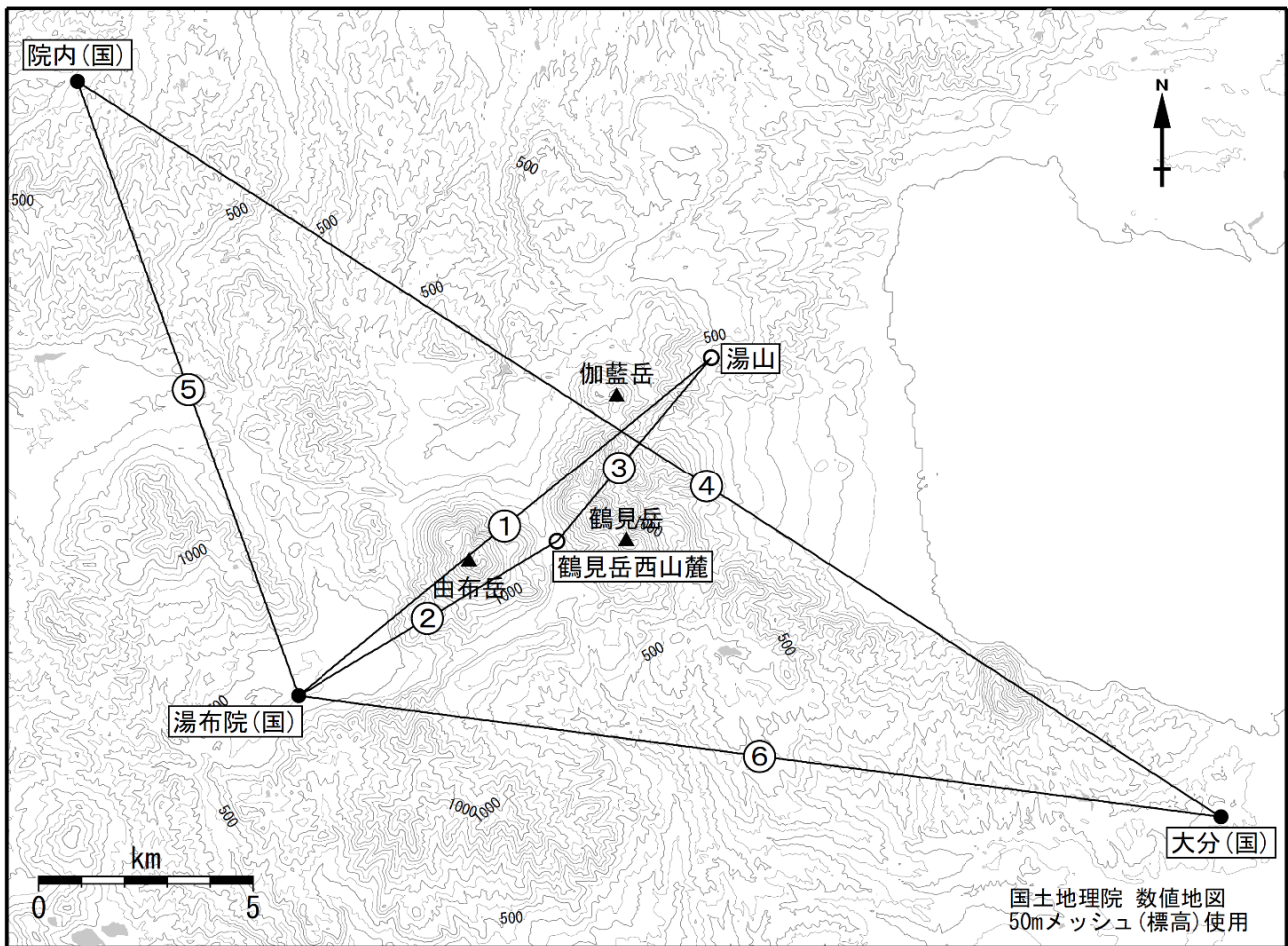


図7 鶴見岳・伽藍岳 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院

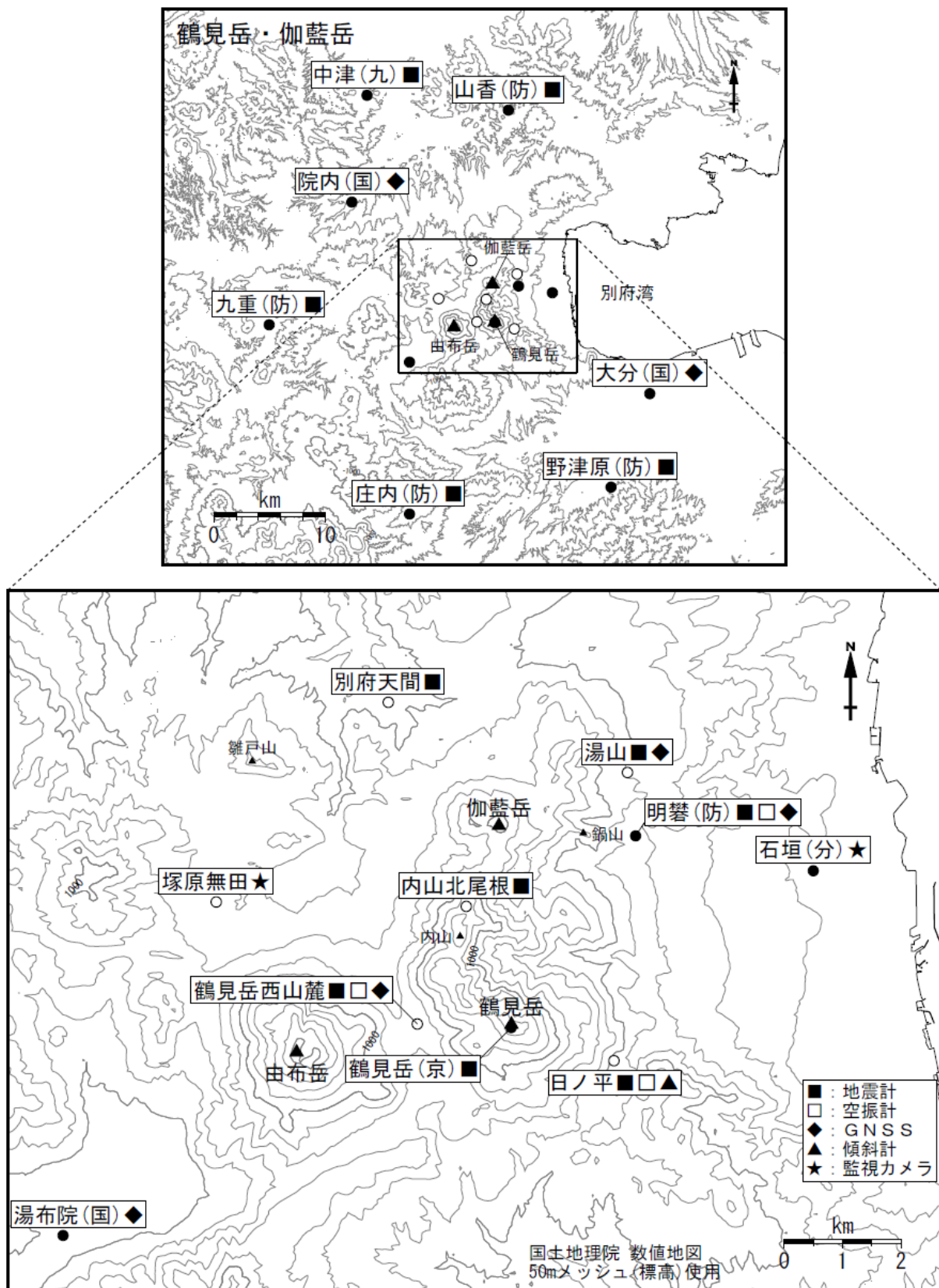


図8 鶴見岳・伽藍岳 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(京)：京都大学、(九)：九州大学、(防)：防災科学技術研究所、(分)：大分県